
なのは一途のはずがどうしてこうなった？

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なのは一途のはずがどうしてこうなった？

【Nコード】

N7866Z

【作者名】

葛根

【あらすじ】

高町なのは一筋の主人公だが、何故か共有物扱いに追い込まれる。

本命の高町なのはを筆頭にどこかおかしいヒロインたちが紡ぎだす物語

プロローグ（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

プロローグ

高町なのは達との初めての出会いは約10年前だ。

管理局の訓練学校で同い年。

それだけの理由で話しかけられた。

当時の年齢でランクAAAクラスの魔導師は珍しく、高町なのは達
は異常であった。

されど、ミウラ・ケイタもまた、異常な人物である。

ミウラ・ケイタは管理外世界の住人であった。

だが、高町なのは達の話聞けば聞くほど、似た世界で生まれ、育
った。

第97管理外世界「地球」が高町なのはの出身である。

一方、第48管理外世界「アース」がミウラ・ケイタの出身だ。

文化レベル。魔法の有無を含めて極めて似た世界であった。

それらを話の種に互いが語り合い、仲良くなったのは当時の年齢か
らも男女の区別の意識が低くまた、同年であることから、友人とな
るまでに時間は掛からなかった。

そして、極めつけはミウラ・ケイタの保有する魔力量であった。

ランクこそ彼女達に劣るものの、魔力量は彼女達の総合魔力量を超
えていたのだ。

さらに、レアスキル持ちである。

それは、魔力供給だ。

ミウラ・ケイタは高町なのは達の同期に比べ、出勤回数が異常に多
かった。

その理由として魔力供給と魔力量の組み合わせからなる補助の役目
を担うという役割を持っていたからである。

つまりは、補給物資扱いだ。

だからこそ、本来のランクとは関係なしに、危険度の高い任務や、災害救助などの事件を多く経験することになり、それがミウラ・ケイタの戦術、戦略眼を育み、成長させ、開花させる要因となったのだ。

奇しくも10年間と言う歳月の殆どを現場から学び、生き延び、時には役に立ち、戦い続けた事で彼の経験値は膨大なモノになった。そして、現場での役割を一旦終え、というか、ギブアップして。ある年から教官を目指す。それは、管理局員の若手育成を目的とした戦技教導官であり、戦術講師であり、現場において生き延びる術を教える立場になるうというものであった。

何故、教官なのか。

それは、安全だから。そして、楽しんで仕事をしたかったからだ。

そんな半端な思いで受けた戦技教導官試験は見事に落ちて、同期の高町なのは一発で合格した。

結局、高町なのは遅れること3ヶ月後、二度目の試験で合格を掴みとる。

彼女は忙しい中、ミウラ・ケイタの試験対策に時間を割き合格時にはきちんとお祝いをしてくれたのだ。

その時からだろうか。

彼が彼女を意識し始めて、彼女が彼を意識し始めたのは。

互いに奥手であり、忙しくなった為会う時間が減った。

そんな中でも月に一度は二人で食事に行ったり、洋服を買いにいたり青春らしい青春を送り、ついに男のほう告白をしたのだ。初めてのキスは18の時であった。

互いが意識し始めて3年の月日が経った頃の話である。

しかし、相手はエースオブエースの称号を持つ管理局の人気者だ。

交際は秘匿するものであると男は説得する。それに、渋々了解をした彼女は怒りもしたが、自分の為という事も理解していた。互いに男女として認め合い、相思相愛の関係だ。自然と肉体的な欲求が湧き上がり、そういう行為をしようと決心して、日にちまで決めた。いざ、行為をしようという雰囲気が高町なのはの部屋で求め合ったのだが、どこからかその情報がリークされており、秘匿されていたはずの交際がフェイト・テストロッサ・ハラウン、八神はやて一同の寝室突入という形でバレってしまったのだ。

「申し開きは？」

言及するのは高町なのはの親友であるフェイト・テストロッサ・ハラウンである。

彼女は表面上は怒っていないように見えるのだが、長い付き合いのミウラ・ケイタにはその内情が手に取るように理解できた。それは、つまり怒っている。

「えー、秘密にしていたことは申し訳ない。だけど、真剣交際！
そう！ 真面目にお付き合いをしています」

「機動六課立ち上げ前にスキャンダルは困るわ」

苦笑いの八神はやてもやはり、表面上はいつも通りだが、怒っていた。

「フェイトちゃん、はやてちゃん。秘密にしていたのはごめんだけど、ケイタが言う通り、清いお付き合いを」

「嘘！ だって、その、しようとしてたじゃない！」

顔を赤らめ叫んだのはフェイトだった。

「その、なんだ。まだ未挿入だったから良いじゃないか。テスト口
ツサ」

シグナムは味方らしい。

「どうだかな。隠れて付き合ってたんだ。一回位してんじゃねーの
？」

幼女体型の赤い格好のヴィータが容姿に似合わない発言をする。

「でもでも、ゴムも準備してましたし、日付的にも安全日ですよ」
医学的見地から意見するのはシャルル先生だ。彼女はどこかずれて
いる気がする。

「……」

俺以外の唯一のオス。ザフィーラは沈黙を守ったままである。

「と・に・か・く！ そういう行為はお預けや！」

激を飛ばすはやてにヴォルケンリッターは頷く。

夢にまで見た初体験はタヌキ同盟に阻止されてしまった。

後日解ったことはなのはのスケジュールと俺のスケジュールをハッ
クして閲覧したのはリインフォースだったということだ。

子供を過ぎ大人の階段を上がる。
友人はそれを阻止し足を引っ張る。

配点：（謀略）

なのはの意見が多かったので勢いで書いてみた。
基本的にギャグ方向に走る。
シリアス？ 何それ美味しいの？
更新は不定期。続くかはしらん。

プロローグ(後書き)

誤字修正

第一章 謀略と方向性（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第一章 謀略と方向性

男女の仲を意識した上で肉体関係を結ぶはずが失敗に終わった。

互いに若く、欲求に素直であった。

一度の邪魔でめげるような精神を持ち合わせていない。

不屈の精神の持ち主である高町なのはは再度の密会を求めたのだ。

『今度私達が会うときにはちゃんとしようね』

フエイト・テストロツサ・ハラオウンは長年の友人に疑惑を持つ。

好きな人ができたらお互いに教えあおう。

それを破ったのは他ならぬ高町なのはであった。

その約束はまだ互いが幼い頃にしたものので時効があるのなら既に時効を迎えていると思う。

それに、私も約束を破っていた。

高町なのはの恋人であるミウラ・ケイタが好きなのだ。

それも、出会ってから直ぐの事だった。

私と同じで両親がおらず天涯孤独の男の子。

明るくて優しく初めでの異性の友だちだ。

執務官試験に落ちた時は一緒に悲しんでくれた。

過去問題や傾向と対策を彼が集めてきてくれた。

それでも、試験には二度落ちた。

二度目の時は慰めてくれた。

『諦めたら終わりだ。だからさ。落ち込んで、一番下まで落ち込んで』

だらあとは上がってくるだけだよ。それに、頑張っているフェイトの事、尊敬してるんだぜ?』

三度目の試験で合格した。嬉しくて嬉しくて、泣いた。

『すげーぜ! よっし。祝いだ! ケーキパーティーだ』

義母のリンディ・ハラウンと義兄のクロノ・ハラウンとなのは達を集めてくれて、お祝いパーティーをした。

その時、私は彼を好きだと感じた。

本当の家族がない彼は祝う事があっても祝われる事がない。

私が家族になつてあげると。

言いたかった。

それが好きの始まりだった。

だが、今の今まで好きと言えなかった事に後悔をした。

「だって、恥ずかしい」

自分から告白するのは。

だから待った。それがいけなかったのだ。

ならば、

「振り向かせる。それとも、う、奪う?!」

妄想だ。落ち着こつ。

恋愛経験のない自分ではわからない。だから聞こつ。

「バルディッシュ。どうすればいいと思う?」

『既成事実を先に作ってしまえば男というものは責任を取ると判断できます』

長年付き添ったインテリジェントデバイスの判断だ。
恥ずかしいけど、それが正しいはず。

「それは、つ、つまり。え、えっちな事をなのはより先にするって事？」

『イエス、マスター』

フエイト・テストロツサ・ハラオウンの間違いは、機械であるデバイスに解答を求めた事でありそのデバイスもまた効率を求める機械であった。

つまり、効率的に相手を倒す事を示すデバイスは、

『ユー、やっちなよ。特に大切なのは避妊具を使わないことだぜ。マスター？』

妊娠という最大の結果を周りに理解させることがマスターの求める女の勝利だと導いたのだ。

八神はやては己が従えるヴォルケンリッターを招集していた。

「会議や！」

激を飛ばす。

「出遅れたで！ まさかなのはちゃんがミウラっちとお付き合いをしているなんて恥やで！ なあ？」

八神はやての予定は崩れた。

本来なら機動六課にミウラを入れて上司権限であんなコトやそんなコトをしようと策略を練っていたのだが思わぬ失態をした。

「しかし、主よ。あの二人が本気で付き合っているのなら身を引くべきでは？」

烈火の将、シグナムが正論を言う。

「アホか！ シグナムがミウラっちでオナってんの知ってんねんで?!」

「な、何故ソレを！」

烈火の将は顔を烈火のごとく赤くした。

それはプライベート侵害！

「リインは何でも知ってますですー」

よおし潰そう。プチっと潰そう。管理人格だろうが、プライベートは守られるものでなければいけないはずだ。

「ちなみにシャマルが一番回数が多くて次にシグナムで最後にヴィーたちちゃんですー。この淫乱豚どもですー！」

自分と同じ境遇の人物がいて安堵する。

よかった自分だけじゃない。

こんなに嬉しいのは久しぶりで涙がでる。

「そーゆーわけで、皆ミウラっち好きなのは知ってんねん。だから、手に入れるのは当たり前やろ？」

「はやてちゃん。何かいい手があるの？」

シャマルが顔が赤いまま聞いた。

ヴィータは俯いている。ダメージが大きかったようだ。

「最終手段や。既成事実を作る！ やってしまえばこっちのもんや」

「主はやてよ。そ、それはつまり、どうゆう事ですか？」

聞く。

まだ主と呼ぶ辺り私は忠実な騎士だな。

「アレだ。はやての隠してる本にあった逆レイプってやつだろ？」

ヴィータ！

どこでそんな風に染まってしまったのだ？！

「ぐっ。私の秘蔵の本を……。まあええ。不問や。実際、ヴィータ

の言つとおりミウラっちを襲うんや」

「はやてちゃん、それって犯罪じゃ？」

シャマルが不安に思っている事を告げた。

「大丈夫ですー。女性から男性への強姦被害は通報される方が少ないですー。もし通報されても、もみ消す準備は万全ですー」

「そういうことや。機動六課設立とミウラっちを逆レイプするとい
う任務。大変だとおもっけど。頑張つてやー！」

「はい！」

女達の声が重なる。

置物となっていたザフィーラはミウラの身を案じ静かに思った。

もげろ、と。

決心と覚悟

己の運命が知らず決まる

配点：（被害者）

原作崩壊がこれほど楽しいとは。
キャラがおかしくなってる。

だけど後悔はしていない。

今後も崩壊キャラがでますので、原作を大切に思う人はここらで読むのをやめてください。

注意はしました。

第二章 人事異動と恋人（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りマジで原作崩壊しています。

第二章 人事異動と恋人

若干19歳でありながら歴戦の英雄達と出動回数が並びつつある人物がいる。

伝説の三提督の一人は言う。

『私の若い頃でもあんなに使い回される奴はおらんかったよ』

さらにもう一人は、

『確かに。しかし、本人も満更ではなさそうだった。実に勤労者だ。若い子はアイツを見習え』

最後の一人は、

『そろそろ我等に戦歴が並ぶんじゃないかね？ 威厳が弱くなりそうだから人事で教官にしようぜ。アイツ、戦術と戦略眼は我等に並ぶ勢いだもん。若い奴に負けたくないんだからねっ』

つまり、本人の望みと上層部の望みが一致したのだ。

人事異動通達。

お前、生意気にも戦歴がすごいから教官にしてやんよ。

エースオブエースと同じ教導官な。あれ？ 資格もってんの？ お

い！ 人事なにやってんの？

まあいいや、人事異動命令ね。

エースオブエースと協力して精鋭を育ててね。　ここマジな。
あと、エースオブエースはマジ怒ると厄介だから怒らすなよ？　絶
対だぞ！

追記

機動六課頑張ってるね。

三提督一同より。

え？　これ、マジ？

人事部に緊急で呼ばれて来てみれば伝説の三提督から勅命で人事通
達が届いていると人事の女の子が慌てて、でも内容みて俺が吹いた。

「ミウラさん。伝説の三提督からの人事通達なんて前代未聞ですよ
?!」

人事の女の子は俺と同じ年位である。あの伝説の三提督からまさか
の指令だ。

一般的な管理局員には雲の上の存在だ。

「そうらしいね。俺、教導官だつて。前々から申告してたのが通っ
たと思つて死力を尽くします」

敬礼。

人事の女の子は慌てて返礼。

「あの、サイン下さい。ファンなんです。最新刊買いました」

そうやって最新刊である『訓練生の苦難』を胸の前に出した。ささっとサインを書いて

「購入どうも。今後も難シリーズをよろしくね」

「はい。ありがとうございます」

立ち去った。管理局員でサインをしたのは何人目だろうねえ。数えきれない。

自分の体験した訓練学校時代をフィクションにして物語を作って某出版社に出したら佳作扱いで受賞して、そこから難シリーズが意外に人気がでたな。

趣味で書いた物語で思わぬ副収入を得ているので金はある。

だが、暇がない。だから現場から教える側に移動したかった。

今回の人事は渡りに船だ。

特になのはと一緒に仕事ができるのが嬉しい。

人事で良かったと思える日だ。大ファンである作家が目の前にいたからだ。

訓練生の困難、訓練生の至難、訓練生の苦難と続く難シリーズと一般的には呼ばれている書籍だ。

さらに、射撃の心得、体術の心得、空戦の心得、陸戦の心得と続く心得シリーズの著者でもある。

どちらも管理局員を中心に人気が出て一般書店にも並ぶ様になった書籍だ。

作者のミウラ・ケイタさんに会えた。サインを貰った。

写真が取ればよかったんだけどさすがに仕事なので自重した。

顔は悪くない、むしろ良い方だと思う。

思った通りの人柄で良かった。

後で皆に自慢しよう。

「うっす！」

「アレ？ ケイタじゃないか。無限書庫に何か用？」

ユーノ・スクライアだ。

彼は管理局の七不思議の一つ。というか疑惑がある。

実は女の子なんじゃないの？

だがそれは確認済みである。

「なに、お前の顔を見に来た」

「ふーん」

薄い反応である。

理由は明白で、彼が男である証明に股間を握った時から親友から友人へ降格したのだ。

それに、同人活動でユーノ・スクライアが犯されまくる物を同人即売会で発売した事がバレた辺りでかなり怒られた。

でも、その年の一番の売上だった。

「まだ怒ってる？」

「そりゃね。僕がBLの主人公で性欲を排除する糧になってるんて知らなかったからね！」

半年も怒ってるんてケツの穴の小さいやつだ。

まあ、そのケツも今では一部に狙われているとかで申し訳ないと思う。

「謝つたる？ それにエロデータ上げたじゃん。何？ 今度は合コンか女の子紹介すればいいの？」

「そついう問題じゃないよ！ 僕を女装させたコラとか完成度高すぎだよ！ 未だに後輩に『ユーノさんって女の子なんですか』って聞かれる気持ち君にわかる？ わからないだろ？ 次やったら絶交だからね？」

うむ。

「マジすまん。でもお前の顔だったら勘違いする。もっと男らしい格好すれば？」

「はいはい。じゃあね。仕事だから。君も仕事あるんだろ？ こんな所で油売ってないでさつさと戻れよ」

今日も許してくれなかったか。今後は自重しよう。ユーノを怒らせると怒り期間が長いからな。

偶然。たまにあることだが管理局内でなのはとぼったり会った。

「帰り？」

「うん」

なら一緒に帰ろうとなるのは恋人同士なら当たり前の事だ。

「人事で今度からなのはと一緒の職場になるよ」

「ほんと？ そつかあ。やっと人事通つたの？」

以前から一緒に働くために人事に申請を出していたことを思い出し

たように聞いてきた。

「まあ、そんな感じ。で、今日この後どうする？」

それは肉体関係を結ぶかどうかの問いである。

「ホテルにしよう。やっぱり部屋だとフェイトちゃんとかまた邪魔して来そうだしね」

「わ、わかった」

気迫のこもった表情だ。それに若干赤い顔だ。

きちんと確かめたい。そして繋がり合いたいと思う。
だからこそ、

「これからよろしく」

「うん！」

お願いした。

期待するのは職場か行為か。

配点：（恋人）

前回注意したので苦情等受け付けません。

あと、時空系列的には機動六課立ち上げ前です。

まあ、あまり気にせずに。

そのうち戦闘とかあるはず。たぶん。

第三章 結びと親友（前書き）

この小説は魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気重視される方はご注意ください。

割りとマジで原作崩壊しています。

第三章 結びと親友

ホテルと言つても様々な種類のホテルがある。

高町なのはが選んだホテルは所謂高級ホテルであつた。

レストランで食事をして、そのまま宿泊になる。

表向きは今後の教導官同士での語り合いである。

仕事である以上領収書を切るのだが、その辺りが高町なのはの小狡い所であつた。

さらには、昨日高町なのはの友人たちに釘を刺されたのにも関わらず翌日にまさか約束を違えるとは思ひもよらなかつただろう。

だからこそ、二人きりでホテルに外泊できたのである。

事の始まりは高町なのはからであつた。

唇を求め合う。

唐突ではあつたが、そういった行為をすると約束をしていたので応じた。

お互いに管理局から支給された制服であつたが、それはすぐに無くなり互いに生まれたままの姿になつた。

息を呑む。

「綺麗だ」

それが男の感想であつた。

女性の身体という物を初めて直視したのだ。

「明かり消して、恥ずかしい」

薄暗い光の下の一つのベッドで重なりあう。

互いに初めてである。

それでも、男の方がリードする。

知識だけは人一倍あると自負する男は女の身体を喜ばせる事にした。完全に受けるだけの女は初めての性感に不安と喜びがあった。

興奮した男の物を薄暗い中初めて直視する。

思った以上に大きい。

そして逞しいと感じる。

だが、愛おしいとも思う。

手と口だ。

互いに刺激しあう。

初めて異性に触れられた同士達するのは早かったと言える。

それでも回復は早かった。

互いに準備は万全でついに互いの初めてが繋がったのだ。

「痛くない？」

「うん、大丈夫」

涙した。それは嬉しさと痛さが交わったもので悲しいものではなかった。

二人は実感する。

繋がり合うことの愛おしさと快樂に心まで浸されて満足できるのだ。

朝帰りだ。

高町なのはは自分の中に残る痛みと確かな心の温もりを感じて満足気に自室に戻る。

時計の針は5時を示しており、自室で寝ているはずの親友を起こさない様に静かに扉を開いたのだ。

「げ、フェイトちゃん？」

「おかえり。なのは。随分遅い帰りだね」

高町なのはとフェイト・テストロッサ・ハラオウンは10年来の親友である。

その親友の感情が読めない。

無表情を貼り付けにした顔が怖いと思った。

「ち、ちよつとお仕事で、話が長くなってそのまま外泊しちゃった」

「ふーん……。その話し相手って誰？」

正直に答えるべきか誤魔化すべきか迷う。

これ以上嘘を重ねるのは心苦しい。

「えーと、ケイタ君と、仕事の話……」

「それって二人きりで、しかも高いホテルで、一緒の部屋で！
泊まって！ することなのかな？」

激昂だ。

だが、

「でも、結ばれた事をお祝いするのが親友かな？」

泣かれた。

どこで私達の情報を手に入れたか気にあるが目の前の人物を落ち着かせないといけない。
情緒不安定だ。

「落ち着いて、フェイトちゃん！」

「私、落ち着いてるよ？ だからね、お願い聞いて？」

明らかに落ち着いていない。

だから相手の言い分を聞こう。

「な、何かな？」

「なのは私達との約束を破って裏切った。だから私も裏切っていないよね？」

何を？ と聞こうとしたが、

「今度の休み。ケイタ君貸して？」

無表情のまま告げられた。

「目撃情報と、ホテル側の顧客情報から間違いないですー」

八神はやては報告を聞いて頂垂れた。

まさか約束を翌日に破られて、さらに膜まで破られているとは。

「さすが、エースオブエースや。名実共に誰よりも先にいきおる。こっから先は戦争や！」

それはつまり、

「手段、場所を選ばず、犯せ」

勝てば良いという目的のためには手段を選ばない卑劣な手だ。

「しかし、主はやてよ。私達が先に、その、してしまってもかまわないのか？」

「かまわへんで。何故なら、ヴォルケンリッターは私の所有物扱いや。それを理解しているミウラっちは事後、必ず私の元へ来る。すいません。貴女の物に傷を付けてしまいましたと。そこでや！私は優しく答える。別にいいんや。男女の仲なんてどうなるかわからへん。でもな、責任をとらないかん。わかるな？ 私の言うこと一つ聞けば許したる、と」

「で？」

興奮した様子の主に問う。

「それでや。ミウラっちは言うことって何と聞く。それは、私を娶ることや。そうすれば万事解決。所有者を妻にすればそれに連なるヴォルケンリッター付きや。愛人3人やで？ お得パツクや。これに乗らん男はおらへんやろ?!」

ああ、そうか。主はやてはバカだ。

「はやてちゃん自体が攻めに行ったりしないんですか？」

シヤマルがバカに問うた。

「は、恥ずかしいやん」

頬を朱に染めて顔を押しさえる手は可愛らしいのだが、

「何を今更。はやて。私が一緒について行ってやるぜ」

ヴィータもバカだった。彼に幼女趣味があるかは知らないが、ヴィータは結構可愛がられている。だからこそ近づきやすいと自負しているのだろう。全く。

私は剣術指南役で明日彼と会うというのに。忘れているみたいだ。それに言う必要ないはずだ。一番槍は私が頂くとしよう。

男女は大人の階段を駆け上がる。結ばれた絆。刻まれた傷跡。

配点：（契）

セーフなはず。

あと、エロ描写に抵抗がある人はすまんね。読ませておいて謝罪とか作者は阿呆だな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7866z/>

なのは一途のはずがどうしてこうなった？

2011年12月28日09時25分発行